

乳茶嗜好 —— 中国の文人たちを中心に

はじめに

茶は重要な嗜好品であるが、従来の中国茶文化研究において、茶の中にバター（酥）やミルク（乳）などの乳製品を入れる形態の茶は殆ど注目されてこなかった。このような茶を「乳茶」と呼ぶ。乳茶は古くから現在に至るまで専ら中国周辺の遊牧民族のものであり、乳製品と漢民族は無縁であるかのように思われているが、果たしてそうだろうか。今回の報告は、漢民族、特に文人たちの嗜好品としての乳茶文化を中心に検討する。

一、 喫茶法と乳製品（酥、酪、乳）

二、 唐代の乳茶

「皇孫奉節王好詩。初煎茶加酥椒之類。求詩。泌戲云「旋沫翻成碧玉池、添酥散出瑠璃眼」。奉節王即德宗皇孫也」¹。（唐代李繁の『鄴侯家伝』）

三、 宋代文人の乳茶

- ・ 劉一止の詩「允迪以羊膏瀹茗飲呂景実景実有詩歎賞僕意未然輒次原韻」²
- ・ 方鴻飛の詩「宣妙樓」³
- ・ 曾幾の詩「食酥一」⁴
- ・ 陸游の詩「戲詠山家食品」⁵
- ・ 虞儔の詩「以酥煎小竜茶因成」⁶
- ・ 『五灯会元』⁷

四、 元代文人の乳茶

- ・ 蘭膏茶、酥簽茶（両方ともバターと上質の江茶茶末を混ぜて飲むもの、蘭膏茶はさらに塩を入れる）
- ・ 劉敏中の詩「浣溪沙」⁸
- ・ 陳旅の詩「次韻陳景思見寄」⁹

五、 明代文人の乳茶

- ・ 楊慎の詩「月団茶歌」¹⁰
- ・ 程敏政の詩「齋所謝定西侯惠巴茶」¹¹
- ・ 張岱の『陶庵夢憶』「乳酪」¹²

六、 清代文人の乳茶

- ・ 彭孫貽の詩「山堂初夏」と「恵山寺次鄧原岳韻」¹³
- ・ 陳廷敬の詩「陟岵樓詩」（二十之九）¹⁴
- ・ 沈季友の詩「燕京春咏」¹⁵
- ・ 袁枚の『随園食單』¹⁶

おわりに

【参考文献】

- 高橋忠彦「中国の喫茶の重層性 —— 詩語と真実」『アジア遊学』(88)、85-97頁、2006年。
布目潮瀧『中国喫茶文化史』岩波書店、2001年。
陳高華「元代飲茶習俗」『歴史研究』(1)、90-94頁、1994年。
鍋田文三郎『チーズのきた道』講談社学術文庫、2010年（1977年初版）。
施由明「明清中国皇室的飲茶生活 —— 明清中国茶文化研究之二」『農業考古』(5)、88-95頁・99頁、2006年。

[注 釈]

- 1 紙面の関係で、パワーポイントに出る資料の書き下しを省略する。
- 2 劉一止『苕溪集』卷四「允迪以羊膏瀹茗飲呂景実景実有詩歎賞僕意未然輒次原韻」精金不受釧釵辱、瑞草何曾取膏腹。乳花粥西名已非、薦以羊肪何太俗。山林鐘鼎異天性、難遣華腴偶窮獨。森森正味苦且嚴、玉質無瑕誰敢戮。君家饌林多錯本、詭罷流涎誑枯吻。故令茗碗變腥臙、遠想黃封雪花醞。呼酪為奴逢彼怒、自惜爭雄巧相妒。我寧不飲信我說、獨喜君詩有神助。君不見穆家兄弟故可人、概以骨鯁恐異趣。〈精金釧釵の辱を受けず、瑞草何ぞ曾て膏腹に取らん。乳花粥西名は已に非なり、薦むるに羊肪を以てすれば何ぞただ俗ならん。山林鐘鼎天性異なり、華腴をして窮獨に偶せしめ難し。森森たる正味苦く且つ嚴たり、玉質瑕無くば誰か敢えて戮せん。君家の饌林錯本多し、読み罷つて涎を流し枯吻を誑す。故に茗碗をして腥臙に変えしめ、遠く想う黄封せる雪花の醞。酪を呼びて奴と為せば彼の怒に逢わん、自から惜む雄を争いて巧みに相い妬む。我寧ろ飲まず我說を信じ、独り喜ぶ君の詩に神助有ることを。君見ずや穆家兄弟故より可人たり、概して骨鯁を以て恐く趣きを異にす。〉
- 3 傅璇琮等主編、『全宋詩』第七十二冊、45697頁(北京大学出版社、1998年)。方鴻飛「宣妙樓」云觀烟樓是梵家、竹圍如洗逼寒沙。因風綠浪搖晴麥、遇雨紅香落潤花。人鎖鎖房聽鳥語、僧歸晚塢放蜂衙。不須老遠來沽酒、只覓天酥為點茶。
- 4 曾幾『茶山集』卷八「食酥一」貢包分自浙西東、函谷金城在眼中。泛酒煎茶俱愜當、滿前蠟雪化春風。〈貢包分かれること浙の西東よりし、函谷金城眼中に在り。泛酒煎茶俱に愜當し、滿前の蠟雪春風と化する。〉
- 5 陸遊『劍南詩藁』卷三十八/七「戲詠山家食品」牛乳挾酥瀹芽苳、蜂房分蜜漬棕花。旧知石芥真尤物、晚得萋蒿又一家。疏索鄉隣緣老病、團欒兒女且喧嘩。古人不下藜羹糝、斟酌龜堂已太奢。
- 6 虞儔『尊白堂集』卷二「以酥煎小童茶因成」水分石鼎暮江寒、灰拔磚爐白雪乾。蟹眼已收魚眼出、酥花翻作乳花團。撐腸尚有書千卷、枵腹無憂食一簞。只欠綠珠煎點在、詩情寧使愧龜官。
- 7 納濟、蘇淵雷注訳、『中国佛教典籍選刊：五灯会元』、545頁、(中華書局、1984年)。「翁呼童子致茶并進酥酪。師納其味、心意豁然。翁拈起玻璃盞問曰：南方還有這箇否？師曰無。翁曰尋常將甚麼喫茶。師無對」。
- 8 唐圭璋『全金元詞』(下) 775-776頁(中華書局、1979年)。劉敏中「浣溪沙」元夕前一日、大雪始霽、子京、敬甫兩張君過余秀江別墅。既坐、皆醉酒、索茶、遂開玉川月團、取太初岩頂雪、和以山西羊酥、以石竈活火烹之。而瓶中蠟梅爛漫、於是相與嗅梅啜茶、雅咏小酌而罷。作此詞以志之。號號清流淺見沙、沙邊翠竹野人家。野人延客不堪誇。旋掃太初岩頂雪、細烹陽羨貢余茶。古銅瓶子蠟梅花。
- 9 庶吉士顧嗣立編『元詩選』初集卷三十七。陳旅の詩「次韻陳景思見寄」用世已無伎、高人方據梧。詞林忝供奉、客舍佞微呼。拓落需微祿、騫騰失壯囚。為文下枚孺、力穡後孫偷。春草生湖曲、晴雲飛屋隅。論交尊有蠹、意別履非鳧。擬汎鷓夷舸、重遊泰伯都。山泉刺雪乳、石笋瓊瓊酥。作鱸溪庖近、聽猿野磴紆。松風吹綠鬢、花雨落紅氍。佳什勤相贈、幽期愧獨踰。煩君語宗長、為我謝寅夫。〈世に用いられて已に伎無ければ、高人方に據梧す。詞林に供奉を忝えて、客舎に微呼を伝う。拓落微祿を求め、騫騰壯囚を失う。文を為しては枚孺に下り、穡を力めて孫偷に後る。春草湖曲に生ず、晴雲屋隅に飛ぶ。交を論じて尊に蠹有り、別を意いて履鳧に非ず。鷓夷の舸を汎かべと擬り、重ねて泰伯の都を遊ばんとす。山泉雪乳を刺み、石笋瓊瓊を瀹す。鱸を作りて溪庖近く、猿を聴きて野磴紆る。松風緑鬢を吹き、花雨紅氍に落ちる。佳什勤しんで相い贈り、幽期獨踰に愧じる。君に煩わして宗長に語り、我が為に寅夫に謝す。〉
- 10 楊慎『升菴集』卷十四「月團茶歌」唐人製茶碾末以酥滷為團。宋世猶精。前自元代以來、其法遂絕。予效而為之。蓋得其似。始悟唐人咏茶詩、所謂膏油首面、所謂佳茗似佳人、所謂綠雲輕挽湘娥鬢之句。飲啜之余、因作詩紀之并伝好事。膩鼎腥甌芳醕蘭、粉槍末旗香杵殘。秦女綠鬢雲擾擾、班姬宝扇月团团。蘭膏點綴黄金色、花乳清冷白玉瀾。先春北苑移根易、勺水南潯別味難。〈膩鼎腥甌芳醕の蘭、粉槍末旗香杵に残る。秦女の緑鬢雲擾擾たり、班姬の宝扇月团团たり。蘭膏黄金の色を点綴し、花乳清冷たりて白玉の瀾。先春の北苑根移し易く、勺水の南潯味別ち難し。〉
- 11 程敏政『篋園文集』卷七十七「齋所謝定西侯惠巴茶」元戎齋祓近青坊、分得新茶帶酪香。雪乳味調金鼎厚、松濤声瀉玉壺長。甘於馬湏疑通譜、清讓龍團別製方。吟吻渴消春昼永、愧無裁答付奚囊。〈元戎齋祓して青坊の近くにて、新茶を分かち得て酪香を帯びる。雪乳味を調して金鼎厚く、松濤声を瀉いで玉壺長し。甘きこと馬湏より通譜を疑い、清きこと龍團に譲るも別の製方なり。吟吻渴を消し春の昼永く、裁答の奚囊に付くる無きを愧ず。〉
- 12 張岱『陶庵夢憶』卷四「乳酪自馭僧為之、氣味已失、再無佳理。余自參一牛、夜取乳置盆盞、比曉、乳花簇起尺許、用銅鑊煮之、瀹蘭雪汁、乳斤和汁四甌、百沸之。玉液珠膠、雪腴霜膩、吹氣勝蘭、沁入肺腑、自是天供」。
- 13 彭孫貽『茗齋集』卷二「山堂初夏」綠陰荷蓋送斜陽、華月森寒入夜涼。蕉露四更清鶴響、松花一斛乳茶香。調來鸚鵡詩能解、夢入櫻桃月到床。檢点道書呼侍史、明朝羽袖訪長桑。『茗齋集』卷六「惠山寺次鄧原岳韻」雨過梁溪水半黃、尋遊踏徧古苔荒。杖頭索醉頻何惜、屐齒穿雲濕未妨。陰壑泉鳴飛瀑出、驚雷甲坼乳茶香。因貪山月重登眺、林屋依微接渺茫。
- 14 陳廷敬『午亭文編』卷十二「陟岵樓詩」(二十九)当年文献僅猶存、特為儒臣命討論。慰問本朝無故事、便蕃千載自新恩。賜茶雪乳分供御、瀆酒金漿出上尊。天使一時增感動、伝宣帝語是春温。〈当年文献僅かに猶お存するも、特に儒臣の為に討論を命ず。慰問するは本朝に故事無く、便蕃たる千載自ずから新恩なり。賜茶の雪乳供御より分かち、瀆酒の金漿にて上尊より出ず。天の使一時に感動を増し、帝語の伝宣是れ春温なり。〉
- 15 阮葵生編『茶余客話』卷二 728頁(1959年、中華書局)。沈季友の詩「燕京春咏」曉直歸來數八磚、但逢三五去朝天。東堂旧有教恩事、大例開支月俸錢。暖牖新鋪小炕床、乳茶紅映玉壺光。日長院里無宣喚、翻得清書又幾行。春店烹泉開錦棚、日斜宮樹散流鶯。朝來漫点黃柑露、馬上新茶已入京。
- 16 袁枚『隨園食單』「茶酒單」我見士大夫生長杭州、一入宦場便吃熬茶、其苦如藥、其色如血。此不過腸肥腦滿之人吃檳榔法也。